

日本ホーリネス教団 西落合キリスト教会牧師 安井 聖
牧師：20年 説教塾：20年 セミナー参加：30回ぐらい

マタイによる福音書第9章9-13節の説教

先週一週間、鎌倉で行なわれた教派を超えた牧師たちが集まる説教のセミナーに出席してきました。ちょうど今わたしが朗読をして、ご一緒に聴いた聖書の言葉を、そのセミナーに集まった牧師たちと共に読み味わい、黙想を重ねながら、説教を作成するという学びをしました。わたしはそのセミナーを通じて、ひとつの言葉がたいへん深くこころに刻まれました。今聴いた最後の言葉です。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

特にこの前半の部分で、「わたしが来たのは、正しい人を招くためではない」と主イエスはおっしゃった。主がこの言葉を断固たる思いで語っておられるということに、わたしは気づいたのです。いかなる意味においても主イエスは、「わたしは正しい人を招くことをしない」と言っておられる。わたしはこのマタイによる福音書の物語も、またこの主が言われた最後の言葉も、これまでに何度も読んできましたし、その内容をよく理解していたつもりでした。しかし主イエスがはっきりと「わたしは正しい人を招くことをしない」と言っておられる、その主の強い御思いを自分はきちんと受け止めてきたのであろうか。主の御思いを正しく受け止めることなく、この言葉を理解したつもりになっていたのではないか。セミナーを通じてわたしはそんなふうにならざるを得ませんでした。いったいなぜ主イエスは、こういうことをおっしゃったのでしょうか。

主イエスは収税所に座っていたマタイに声をおかけになり、彼を招いて、ご自分に従ってくるようにと言われました。マタイは立ち上がって主イエスに従った。すると、おそらくマタイの知り合いであったと思うんですが、他の徴税人たち、また罪人と呼ばれる人たちが主イエスのもとに集まってきました。罪人といっても、何か犯罪に手を染めた人たちということを必ずしも意味したわけではありません。ユダヤ教の律法を厳格に重んじる当時のユダヤの社会にあつて、律法に無知であるために、あるいは貧しさが理由ともなつて、律法を守ることのない人々を、罪人と呼んで差別していたという現実があつた。そういう人たちが主イエスのもとに押し寄せてきました。あの徴税人マタイを主がお招きになつたのであれば、自分たちも主に招いていただいていると思つたんでしょう。

主イエスは喜んで彼らと一緒に食事をされました。そんな主のお姿をファリサイ派の人々が見ていました。このファリサイ派というのは、ユダヤの律法を大変に重んじ、この神の戒律に背く者を容赦なくさばいていた人たちです。ですからファリサイ派の人々は、先ほどお話しした罪人と呼ばれている人たちをさばいていましたし、徴税人たちのこともさばいていました。徴税人は、当時ローマ帝国に支配されていたユダヤ人たち、自分の国の人々から、ローマの手先になつて税金を取り立てていました。しかもほとんどの徴税人は規定の税額よりも多くのお金を取り立てて、ローマの権力を背景にして私腹を肥やしていた。そうやって同胞を裏切っていた。ファリサイ派の人々からすれば、そういう人々と主イエスが共に食事をなさることがゆるせませんでした。あのイエスという人は神の律法を教える教師ではないのか。それなのになぜあんな人たちと親しく食事をするのか。そのように主イエスを厳しくとがめる言葉を、主の弟子たちに対して投げつけました。

そんなファリサイ派の人々に向かって主イエスは言われました。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではない」。この言葉をこのように理解したくなるかもしれません。わたしたちは神の戒律に懸命に従っているのに、わたしたちのような生き方をしない連中はけしからん、と自分の正しさを盾に取って相手をさばくファリサイ派の人々。しかしそれはあまりに心が狭いのではないか。そういう彼らの傲慢を戒めるために、主イエスはあえてこのように強い言葉をおっしゃったんだ……。これはそういう話ではないんです。たとえばこういうことを考えてみてもいい。中にはそんなふうには露骨に人をさばかない、謙遜なファリサイ派の人々もいたでしょう。しかし謙遜であっても、自分たちが正しく神の戒律に生きることを重んじ、そういう生き方をしている自分の姿を支えにして自分と神との関係を問い、「ああ、こういう姿であれば自分は神の前に立つことができる」と思う。そういう善良なファリサイ派の人々に対しても、主は同じようにおっしゃる。「わたしは、いかなる意味においても、正しい人を招くために来たのではない」。

わたしは自分がそんなふうには徹底してこの言葉を受け止めていないことを、認めざるを得ませんでした。そして気づきました。わたしも心のどこかで、生活のどこかで、結局は自分の正しさを大事にしながら、自分の正しさを頼りにしながら、それによって神に受け入れていただくこうとしている。わたしはそういう人間ではないか。

先ほどお話しした説教セミナーで、もう亡くなられた方ですがドイツ人の牧師であり神学者であったイーヴァントという人が、まさにこの主イエスの言葉を説き明かしながらこういうことを言っています。「わたしたちは、キリストの到来を求めてもいなければ、期待もしていない人と同じ人間にならなければならない」。もう一度繰り返します。「わたしたちは、キリストの到来を求めてもいなければ、期待もしていない人と同じ人間にならなければならない」。まさにそういう人間のもとに、キリストは来られる。それ以外の所には来られない。

そのセミナーの中でこのイーヴァントの言葉もまた、わたしのこころを突き刺す言葉でした。突き刺されながら、反論したくもありません。いくら何でも、キリストの到来を求めてもいない、期待もしていない、そういう人と同じ人間にならなければならない、というのは言い過ぎではないか。自分が罪人であることを認めるけれども、他方でそんな自分がキリストを信じてはいる、キリストに期待を置いてはいる。しかしそんな自分のキリストへの信仰がどうしても揺らいでしまう……。わたしたちは自分が罪人である姿をそんなふうには考えているのではないのでしょうか。しかしイーヴァントはそういう中途半端な罪の理解をここで退けている、と言ってもいいかもしれない。本当のところ自分はキリストを求めてもいなければ、キリストに期待を置いてもいない。自分の思いや行為の中に、キリストを求めてもいない、キリストに期待もしていない姿を見出してしまうとするならば、わたしたち自身がそこで愕然とする他ない。しかしイーヴァントはそこで語りかける。自分がそのような罪人であることを、大胆に認めてごらん。それほどの罪人であることを認め切るんだ。まさにそういう罪人を招くためにキリストは来られた。他の誰かではない。

このイーヴァントは今日一緒に聴いている物語を、そのような物語として聴いたのだと思います。マタイはまさに、キリストを求めてもいなければ、キリストに期待もしていませんでした。周りの人からさばかれながら、同時にマタイも相手をさばいていたでしょう。そんな思いを抱えながら、収税所に座っていたんでしょう。マタイもまた、自分の中に何らキリストに招いていただける善いものなどなかった。しかしキリストはそのマタイを招かれた。それだけではない。キリストのもとに押し寄せてきた大勢の人々もびっくりしたんだと思うんです。キリストはそこまで徹底して自分たちの中の一切の善い

ものを求めることをなさないで、自分たちを招いておられる。彼らもまた、そういう徹底した罪人に対するキリストの招きの声を聴いた。

それだけじゃない。これはまさにわたしたちの物語です。わたしたち一人一人をキリストはそういうふうに招いておられるんです。「あなたの何かじゃない。もしあなたの何かを問うならば、あなたにはわたしへの求めも、わたしへの期待もない。そうとしか言いようのない罪人であるあなたのもとに、わたしは来ている。他の誰かではなく、そういうあなたを招くために、わたしは来ている」。このキリストの招きは本当にありがたい恵みだと、わたしは思いました。自分の信仰はそれほどに弱いということ、わたしたちは大胆に認めていいということなんだと思うんです。

以前、こういう話を聴きました。ドイツでの出来事です。ひとりの女性が、若くして自分の夫を失った。最愛の夫の死の出来事を前にして、彼女は本当に深い悲しみに陥り、誰が慰めても立ち上がれないような状態になりました。この女性はキリスト者でした。プロテスタントのキリスト者だった。そこでこの女性が属していた教会の牧師が訪ねて、一所懸命に慰めようと試みたのですが、「もうわたしは神を信じられなくなった。神に祈ることもできなくなった」と繰り返すだけだった。そんな彼女の言葉を前にして、その牧師は言葉を失って帰る他なかった。ところがそこにカトリックの司祭であり、また名の知れた神学者であったバルタザールという人が、この女性を思い遣って訪ねた。彼女はバルタザールにも言いました。「もうわたしは神を信じられなくなった。神に祈ることもできなくなった」。バルタザールはこの女性に向かって、断固として言いました。「祈ることができないだって？ そんなはずはないでしょう。小さい頃から教会に通ってきたあなたは、主の祈りを覚えているはずだ。いいかい。わたしが今から主の祈りを祈るから、わたしと一緒に主の祈りを祈ろう」。半ば強引にバルタザールは主の祈りを唱え始めた。何度も何度も。この女性も仕方なく主の祈りを唱え続けました。そして主の祈りを祈り続けるうちに、この女性のところが動かされた。自分は神に祈ることもできなくなったと思い込んでいた彼女のところが崩され、自分の悲しみをありのままに神の前に打ち明けることができた。わたしはこの女性をキリストが訪ねてくださって、招きの言葉を届けてくださったんだと思う。バルタザールを通して、主の祈りを通して、まさに信仰がないとしか言いようがない、キリストを求めてもいなければ、キリストに期待してもいない、そういう彼女にキリストは招きの言葉を語りかけてくださり、彼女を生かしてくださった。

わたしはこのキリストの言葉、「わたしが来たのは正しい人を招くためではない」という、自分自身を問わざるを得ないようなこの言葉が、どんなに恵みに溢れる言葉であるかということに目が開かれる思いがしました。そうだ、わたしはいかなる意味においても正しい人間ではない。それでいい。キリストは罪人であるこのわたしを招くために来られたんだ。

そしてわたしはそういう思いでこの物語を読み返しながら気づかされました。主はまさに同じ招きを、このファリサイ派の人々にしておられるんです。神の掟を守ることによって造り上げる自分の正しさを、自らの土台とし支えとして生きている人々です。また掟を守ることができない人々をさばき、そうやって相手をさばくことができる自分の義を誇りとしていた人々です。しかし主イエスはファリサイ派の人々に対して語りかけられました。13節、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」。これは旧約聖書のホセア書の言葉です。この言葉を通して主は語りかけられた。神の律法に従って一所懸命生きて、そうすることによって神の前に義のいけにえをささげて、そのいけにえを支えにして神の前に立とうとする。そんなことを神はお求めになつてはおられない。神こそが、義人ではなく罪人に対

して憐れみを注いでおられるのだ。そしてそんな罪人に対する神の憐れみを本当に知ったなら、その憐れみに促されて、自分自身も神の求めに従って生きていこうと思うようになる。そのようにして神の掟の道を歩んで行くことができる。

主イエスはこの言葉を語り終えた後に、「行って学びなさい」とおっしゃいました。この言葉は決してファリサイ派をご自分のもとから追い出しておられる言葉ではないんです。当時のユダヤ教の教師が弟子たちに律法を教える時に、その弟子たちに向かって「行って学びなさい」と語りかけた。そのように教師が弟子にしばしば用いた言葉、常套句でした。そういう言葉を、主はファリサイ派に語りかけられたんです。彼らをご自分の弟子になることを認めておられるんです。そうなるように招いておられるんです。ご自分の弟子となり、真実の意味で神のお心に適う仕方でも律法を教える者になってほしい、主はそう願っておられる。

もちろん、それはファリサイ派の人々が、マタイや、この徴税人、罪人たちとは違う正しい者だから、教える資格があるなんて話じゃない。他の誰でもない、このわたしのために、神はキリストを遣わしてくださいと信じる。キリストが正しい人ではなく、罪人を招くために来られたという事実を、わたし自身のための出来事と信じる。そうやってキリストの恵みをわが事として信じ受け入れ、その恵みを人に語り伝えていく。そこでこそ真実の意味で、神の律法を教えることができる。だから主イエスはファリサイ派の人々にも語りかけておられるんです。「わたしは罪人こそを招いている。この恵みはあなたたちにも与えられている」。

これもまた、わたしたちへの語りかけです。わたしたちもファリサイ派です。わたしたちこそ、神を信じていると言いながら、何と自分自身にこだわり続ける人間であるか。そのことを、わたしは自らを省みて認めざるを得ません。人をさばくところは、同時に自分をも深くさばきます。人をさばき、自分の正しさに寄りすがって生きるころは、いったん自分に自信が持てなくなると、不甲斐ない自分自身を厳しくさばいて受け入れようとしなくなる。そうやって心の底で葛藤を抱え続けている姿は、まさにわたしたちのファリサイ派の姿です。そこで自分自身をどんなに痛め、傷つけ、苦しめているか。しかし苦しいのであれば、もう自分の義を支えになんてしないで、自分の力に頼ることなんてしないで、そんなわたしたちを招いてくださり、そんなわたしたちを救ってくださるキリストに委ね切ったらい。そのキリストの救いを受け入れ切ったらい。それなのにそうしていないとすれば、わたしたちは本当の意味ではキリストを求めていないということではないでしょうか。キリストに期待していないということではないでしょうか。

しかしそういうキリストを求めてもいない、キリストに期待してもいない罪人である自分の姿に気づくなら、正しい人ではなく、まさにそのような罪人こそを招いてくださるために来られたキリストのお姿に気づかせていただける。わたしたちを招いておられるキリストの言葉を聴かせていただける。主イエスはファリサイ派の人々にも、ご自分の招きの言葉を聴いてほしいと願っておられる。

わたしはその説教のセミナーで学びながら、たえず思い起こしていたひとつの物語、エピソードがあります。それはプロテスタント教会の礎を築いた改革者のマルティン・ルターが、自分の友人に手紙を書き送ったという物語です。その友人の名はシュパラティンと言います。このシュパラティンもルターと同じく牧師でした。しかし彼は牧師としての働きにおいて大きな失敗をしてしまい、周りの牧師仲間からとがめられました。この出来事がこの人にとって大きな打撃となって、シュパラティンはついに家から一歩も外に出られなくなった。引きこもってしまった。周りの友人たちはそんなシュパラティンの姿を見て、少し言い過ぎたと思ったのかもかもしれません。シュパラティンよ、あなたがしたことはそれほ

どまでに落ち込むことじゃないよ。だから気にしないで、家から出ておいで。そう語りかけて、一所懸命に励ましたそうです。ところがそのような友人たちの言葉では、シュパラティンは立ち上がることができませんでした。自分の愚かさ、醜さ、不甲斐なさを責め続けて、しゃがみ込んだままでした。そんなシュパラティンに対して、ルターは心からの友情を込めて手紙を書き送りました。その手紙の中でルターは、自分も同じ経験をしたことを打ち明けました。自分も自らのどうしようもない不甲斐なさ、罪深さに打ちのめされる思いをしていた時に、そんな自分を励ましてくれた人がいた。ルターはかつてアウグスティヌス会の修道士でしたが、その修道院の指導者であったシュタウピッツという人がルターを慰め励ます言葉を語りかけてくれた。そのシュタウピッツの言葉が、ルターを立ち上がらせてくれた。シュタウピッツは何と語りかけたか。「ルターよ、あなたは自分の大きな罪に苛まれ、悩まされ、立ち上がれないという思いでいるのかもしれない。しかしわたしはそういうあなたに言いたい。あなたは自分の罪を小さくしてしまっている。だってそうじゃないか。あなたは自分の罪を自分で抱え続けているじゃないか。自分の罪を手放すことをせず、救い主が与えてくださる救いを求めようとしないで、自分の罪にしがみつき続けているということは、あなたは自分の罪が自分で抱えることができるほど小さなものだと思っているということじゃないか。でもそうじゃないだろう。あなたの罪を、事実そうであるように、もっと大きくしてごらん。とても自分で自分の罪を抱えることなんてできない、自分で自分を救うことなんてできない、あなたはそれほどの罪人じゃないか。大罪人じゃないか。よく考えてごらん。あなたが赦されるために、神の独り子が十字架に死なれたんだ。あなたの罪の赦しのために、神の独り子のいのちがささげられなければならなかったんだ。ルターよ、あなた自身の罪を絵空事にすることによって、キリストが与えておられる救いを絵空事にしてはいけない。キリストの救いを絵に描いた餅のようにしてはいけない。あなたが真実に自分ではどうすることもできない自分の罪の前に立ち、しかも神の独り子が十字架にいのちをささげて罪の赦しを与えていてくださる事実の前に立つなら、あなたはもう自分の罪に縛られることはなくなるはずだよ」。シュタウピッツもまた、いかなる意味においてもキリストは正しい人を招くために来られたのではないということを、ルターに伝えたかった。むしろルターがそうであったように、自分の正しさの何とも頼りない姿に心乱れ、苦しんでいる、そういう罪人を招き救うためにキリストは来られた。この恵みをシュタウピッツはルターに届けてくれたんだと思います。

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。この言葉をわたしたちの事実としてくださるために、十字架の道を歩み抜かれたキリストが、ここに集まったひとりひとりに向かって、「わたしに従いなさい」と招いておられます。そうであれば、立ち上がって主イエスに従ったマタイの姿は、「そうです、わたしは自分で自分を救うことのできない罪人です」と悔い改め、神の赦しを信じて立ち上がる、まさにこのわたしたちの姿そのものだと、わたしは信じます。祈りをいたします。

主が今、この大いなる罪人の集まりを訪ねてくださり、わたしたちが罪人であるがゆえに招いてくださる恵みを心深く感謝します。いかなる意味においても自分の正しさによるのではなく、自分が罪人であるがゆえにキリストに招かれ、その憐れみによって生かされている恵みを、わたしたちの生涯を通じての喜びとさせてください。あなたの招きを感謝します。主の御名によって祈ります。アーメン。